

リンパ浮腫看護専門外来における治療継続困難患者の日常生活を支える相談支援のプロセスの構造化

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2020-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032631

氏名：千葉 恵子

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲 第44号

学位授与年月日：令和2年3月23日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：リンパ浮腫看護専門外来における治療継続困難患者の日常生活を支える相談支援のプロセスの構造化

論文審査委員：主査 教授 長江 弘子

副査 教授 守屋 治代

副査 教授 青木 雅子

論文内容の要旨

I. はじめに

医療制度改革により、急性期病院の在院日数の短縮化が進み、病院完結型から地域完結型へ変化している。そのため、外来医療が重要となり看護専門外来を設置する施設が増え、外来看護の役割も変化している。

看護専門外来の一つにリンパ浮腫外来がある。リンパ浮腫は、一度発症すると改善困難なこと、炎症を起こしやすく生命の危機に陥る危険性もあるため、日常生活の中で浮腫に対する管理が重要である。しかしながら、治療中断や日常生活の中で取り組むべきケアを継続できない患者もいる。

治療継続困難となる理由は、リンパ浮腫の治療目標設定が難しいことである。リンパ浮腫治療目標は、個別性が高く長期間治療継続が必要となるため成果が見えにくい。そのため、患者と医療者双方が浮腫の軽減といった身体的変化のみを治療目標としてしまう傾向があり、治療継続困難に陥ることが考えられる。

そこで、リンパ浮腫看護専門外来における患者と看護師の関係性に焦点をあて相談面接前から終了までの一連の過程に着目し、相談支援で何が生じているのかを捉え直すことが必要であると考えた。

II. 研究目的

リンパ浮腫看護専門外来の治療継続困難患者の日常生活を支えるために看護師はどのように患者の問題を捉え、その問題に対しどのように支援しているのか、看護師と患者の相互作用に焦点をあてプロセスを構造化することを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：本調査は、相談面接場面のやりとりに何が生じているのか、看護師と患者の相互作用に焦点をあてプロセスを構造化するため質的記述的研究とする。データ収集方法は、相談面接前、相談面接後の患者と看護師に半構造化面接を行った。また、相談面接場面は、患者と看護師の間のやり取りを観察するため参加観察法を用いた。

2. 対象者：リンパ浮腫看護専門看護外来に通院患者で看護師が治療継続困難であると認識している患者とその相談面接を行っている看護師とする。

3. 分析方法：Berelsonの内容分析方法に基づき分析を行う。

1) 個別分析では、「相談面接場面のやりとりに何が生じているのか」という問いをもって分析をする。面接データからできる限り使用した言葉や言い回し方を用いて文脈を崩さずにコード化する。コード化されたものを意味内容の類似性に分類しサブカテゴリ、カテゴリを作成する。3つの場面のカテゴリを用いて図式化したのちに患者と看護師の相互作用の特徴をテーマとして抽出する。

2) 全体分析は、個別分析で得られた患者と看護師の相互作用の意味を概念化するため、相談面接前から相談面接後までの個別分析で得られたサブカテゴリとカテゴリをデータとし、意味内容の類似性に沿って統合し、新たなサブカテゴリ、カテゴリを作成する。

IV. 結果

研究参加人者は、看護師2名、患者6名、6組であった。治療継続困難患者に対する相談支援は、患者と看護師の浮腫に対する捉え方の違いを持ちながらも、『重度な浮腫がある』という共通認識のもと、相談面接では、患者は『施術と語り合いにより心身が楽になる体験をする』ことで浮腫と共生する日々の生活の仕方を捉え直し、看護師は浮腫の状態をアセスメントし『その人に合わせた施術をしながら患者の思いを確認する』ことを繰り返し相互に『どうしたらケアが継続できるか、どうしたら浮腫を持ちながら生活することができるか』という共通の願いに向けて探索するやり取りであった。その結果、患者は【治療を継続すれば楽になる実感】をすること、看護師は【患者の思いを知り専門的知識が活きる】ことで、『治療を継続しようと思える』関係性が強化されるまでの一連の流れであった。つまり、看護師が行う相談支援は、患者と看護師が協働し、問題と対応を探索する協働探索のプロセスであった。

相談面接場面ごとの特徴では、

1. 相談面接前：患者と看護師は、双方で治療継続困難な浮腫を『重度な浮腫がある』状態と捉えつつ、患者は、自らの浮腫と生活の変化など体験から捉え『自分にとって外来通院の必要性の認識』をしていた。一方、看護師は、浮腫の改善を優先的に考えていることから、『浮腫を改善するには患者の努力が不可欠』というテーマが抽出された。

2. 相談面接場面：まず看護師は患者に【浮腫や体調について認識を確認する】ことを行い、実際に患者と浮腫の部位を触りながら状態を確認した。そのあと、現在の浮腫の状態をアセスメントしその患者にとって必要なケアについて探索していた。浮腫の状態とは、「変らない浮腫」「悪化した浮腫」「変化がない浮腫」の3つの様相があり、その後のやり取りに特徴がみられた。

3. 相談面接後：患者は『治療をすれば楽になる実感』、看護師は『患者の思いを知り専門的知識が活きる』、共通のテーマとして『治療継続しようと思える』が抽出された。

V. 考察

リンパ浮腫看護専門外来における相談支援の特徴は、患者と看護師のやりとりを通して、浮腫の改善と浮腫を持ちながら生活をしていくことを患者自身がどのように受け止め、どのようなケアを継続すればいいのか、看護師とともに考え続ける協働探索型のプロセスであった。このプロセスは、「施術と語り合いにより心身が楽になる体験をする」患者と「その人に合わせた施術をしながら患者の思いを確認する」看護師が協働することで治療継続をしようとおもえるまでの一連の流れと考えられる。

リンパ浮腫看護専門外来看護師の相談支援の実践として重要なことは、浮腫に対して患者と看護師の外来通院に対する認識の違いを確認することである。そのため施術時に看護師は、自身が患者をどのように認識しているのかに意識を向け、患者の語りと行動を観察するとともに、目の前の患者の浮腫の状態や思いなどに焦点を当てることで、「患者はどのように浮腫と日々共生しているのか」という当事者性を高めることが重要である。このような姿勢や態度により、患者の体験を引き出し、患者自らが自分の行動を振り返り、何を改善すればよいか、思考をめぐらし患者自身の当事者性をも促すと考えられる。

さらに、リンパ浮腫看護専門外来における相談支援は、浮腫自体のケアを施術と語り合いによって提供するため、患者は心身ともに楽になる体験をすることで外来での治療を続けていることが示された。よって、外来での施術の技術は単なるテクニックではなく、語りからその人の日々のケア方法を理解し、その人に合わせた施術を専門的に実施することで信頼され関係性の強化につながるものと推察される。今後、リンパ浮腫看護専門外来の質向上のためには、施術技術と患者の聞き取りや観察に関する相談支援技術教育が重要と考える。

論文審査結果の要旨

本研究はリンパ浮腫看護専門外来における治療困難患者に対する相談支援のプロセスを構図化することを目的とした研究である。リンパ浮腫は、がんと併発することも多いにもかかわらず、医療者の知識不足や専門外来の存在を知らないなど医療者側の問題によって専門外来に患者がたどり着くことが遅延し治療が手遅れになることに加え、難治性であり治療中断が課題となっている。こうした状況から患者も看護師も目標を見失いがちになる状況に対してどのような相談面接が有効なのかを探り出そうとする実践的な意義がある研究である。

また本研究は事前調査と本調査という段階を踏んで取り組み、知見を積み上げており、文献検討も十分行われている。これらの研究のステップのつながりを明確にすることで本研究の独自性が明らかになると考えられた。結果として、相談面接前の患者と看護師の再分析と研究全体のストーリーは一定の説明力を認めているが、相談支援のプロセスを構図化にむけて、サンプル数を増やし、分析を深めることでより本研究意義が深まると期待される。

千葉恵子氏は、長年のがん緩和ケアやリンパ浮腫に関する臨床経験に基づいた

令和2年3月

教育・研究への熱意があり、実践のみならず実践者教育、ならびに実践者に向けたテキストや解説などの業績を多数有している。常に患者中心のケアの改善に努力と注力する姿勢がある。

研究者及び教育者としての実績はまだ浅いが、本論文作成を通して、その粘り強さや詳細な分析と作業力を培ったことで、これまでの経験を生かした実践に還元する研究を進めていく能力を有していると考えられる。今後、リンパ浮腫外来での経験や相談支援の質向上に向けた教育・研究の推進をすすめるための貴重な存在として期待される存在である。

以上、審査を踏まえ看護学研究として一定の意義を認める博士論文である。